
どっぺる！？

氷純

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

どっぺる！？

【Nコード】

N0121BA

【作者名】

氷純

【あらすじ】

自称天才（男）が生みだした自身のクローンは……女の子？

数々の発明品を持つ少年とそのクローン少女が巻き起こすコメディ。

何故、娘が？（前書き）

不定期掲載です。

何故、娘が？

何だこれは……？

俺は培養機の蓋を開けてそこにいた生き物に愕然とした。

天才であるが故に人に理解されず孤独に過ごしてきた人生、それに終止符を打つ最終兵器を生み出したはずだった。

だがしかし、何だこれは？

培養機の中には天才たる俺を理解できる唯一の存在、つまり俺自身のクローンが入っていないなければならないのに……。

何だこれは！？

いや、混乱している場合ではない。俺は失敗したのだ。その現実を受け入れ原因を究明すべきだ。そう考えた俺は培養機の中に居るそいつを観察する。

若干のウェーブがかかった髪と俺を見上げる瞳は艶やかな黒、日に焼けたことのない肌はきめ細かい粉雪を思わせる。理知的なその顔を見間違えるはずはない。

どう見ても俺だ。それ故に納得がいかない。

「何だ、これは？」

俺のクローン、つまり男にはないはずの胸の膨らみに眉を顰める。身長に比して慎ましやかではあるが確かに膨らんでいる。

体格スキャンの過程で間違えたか。だがよく見れば顔立ちもどこか丸みがある。

「ホルモンバランスか！」

ホルモンバランス調整器はこいつの後ろにある。男性ホルモンを注入するチューブが詰まっているのかもしれない。

俺は裸のそいつを培養機から引きずり出して中を調べる。

「イーピンポーン」

この忙しい時に玄関チャイムを鳴らす空気を読めない馬鹿は何処のどいつだ。無視だ無視！

俺が培養機の中に座り込んでチューブを点検していると後ろからそいつが声をかけてきた。

「らい客ですが？」

生まれたばかりで話すことに慣れていないせいか発音が怪しかった。

「今は手が放せない。代わりに出てくれ」

集中していた俺が振り返りもせず頼んだ事に怒りもせず、そいつは部屋を出ていった。

日常会話に困らない程度の言語力や社会常識をインプットしていたのが思わぬところで役に立った。

こういった抜かりの無さは流石に天才の俺である。等と自画自賛している場合ではない。チューブに異常が見当たらなかったのだ。

「原因は別にあるのか」

原因を考えるべく腕を組んでいると、階下から聞こえてくる声に聞き覚えがあるのに気が付いた。俺の記憶が正しければ段々と語調が荒くなっていくその声は幼なじみの佐奈だろう。

「あのーったいー!!」

何かを叫ぶ声に一瞬遅れて階段を駆け上がる音がした。

……やれやれ、またか。

俺が培養機から這って出ると同時に扉が激しい音を立てて開かれた。

「おい、佐奈。精密機器があるから埃を立てるなと何時も言ってる」

部屋に入ってきた幼なじみに向かっての台詞は最後まで紡げなかった。佐奈の拳が俺の腹に叩き込まれたのだ。反動で強制的に立たされるほど強烈な一撃。部屋に入るなり滑るように距離を詰めると共に腰を捻りながら上体をかがめ、螺旋を描いて俺の鳩尾を抉った右ストレート。完成されたそれは達人の域だった。

「ぐう、腕を上げたな、拳だけにー」

「黙れ変態！」

俺に罵声を浴びせながら繰り出された佐奈の回し蹴りが俺の頭を激しく揺らした。繊細にして流麗な重心移動と最大の遠心力が織り成す体重が乗ったその一撃はもはや神業と呼ぶに相応しい上段回し蹴りだった。

「足を上げたな、上段だけに」

「冗談言ってみました。上段きついで。」

「この頭の回転、やはり俺は天さ……。」

俺の意識はそこで途切れた。

原因は？

妙に柔らかで温い枕の感触が頭を包んでいる。佐奈に蹴られて意識が飛んだから寝かされているのか。

「気がツキましたか？」

瞼を開けるとクローンの声が降ってきた。ささやかな胸の膨らみを越えた真上から……。

「クローンに膝枕されたのは俺が初だろうな」

いやはや、なかなかどうして、感慨深いものがある。

クローンを見上げながら俺は思った。

俺のシャツを着ているのは高ポイントだ。少し大きめのシャツ、その長い袖を持って余し指だけ出ているのが良い。非常に良い。

惜しむらくは顔が俺とそっくりな所。見慣れているからか、異性と認識しにくい。

若干の感動に胸を熱くしていると何処からか殺気が漂ってきた。出所を探すと拳を握っている佐奈がいた。

「起きたなら言い訳しろ。このど変態」

閻魔が腰を抜かしそうなほど素敵な笑顔で命令された。

言い訳なんか聞く気も無いくせに。

「寝た振りすんな！」

諦めて自らの冥福を祈ろうとした俺の襟首を掴んだ佐奈がガクガ

ク揺さぶってくる。

って言うつかやばい。三半規管がピンチ。吐き気がしてきた。

「第一、何で私を出迎えるのが宗也じゃないの？ 何でそっくりさんが出てくんの？ 何でそっくりさんは裸なの？ あんたら一体何してたの！？」

俗に言う質問責めであ……うぶ。

「顔が青くなっています。吐かないように食道を押さえた方がイイです」

ちよっ……。クローン何言ってるの？

「じじい？」

気道も絞まってますって！ 息が苦しい。吐き気と併せて二重苦だよ！

「もっとじじい。キュッと」

クローンさん何ジエスチャー加えてんの！ その擬態語すごく怖いよ！？

俺が必死に暴れて首が絞まっているとアピールした甲斐があつて佐奈はようやく俺を放してくれた。

「大丈夫ですか？」

クローンが俺の背中を撫でて労ってくれる。半分くらいお前のせいだけだな！

「で、説明は？」

佐奈が睨んでくる。

「こいつはさつき生まれたクローン」

さつき、でいいんだよな？ 気絶してたから意識と一緒に時間が飛んでるんだが。

「何で裸か聞きたいのよ」

身元確認が先だろ普通は。

だが、佐奈に理屈が通じない事くらい知っている。

「生まれたばかりだから服を着ていなかったんだ」

そういえば、最低限の社会常識がクローンの頭には入っていたはずだ。なぜ裸で来客対応なんかしたんだ？

不思議に思っただけで本人に尋ねると意外な答えが返ってきた。

「来客には服を着て対応シなくてはイケないとは知りませんでした」

「ああ。当たり前過ぎてインプットし忘れてーくはっ」

「お前のせいかなぁぁぁ！」

俺の脳天を揺らす佐奈の右フックに意識が飛びかける。

この最高の頭脳を内包する素敵に格好良い入れ物をいささかの躊躇もなく殴りつけるとはモノの価値が分からぬ女だ。

「かなりムカつくこと考えてるみたいだけどまあいいわ。それで、

「この子は宗也のクローンなのに何で女の子な訳？」
「問題はそこだ」

俺のクローンであるからには男である筈なのにこいつは間違いなく女だ。

決定的なところは見てないがー

「どこ見てんだ、変態」

佐奈の怒気に気付いて慌てて向き直る。

俺は咳払い一つして仕切り直すと説明を始めた。

「これは仮説だが、遺伝子の問題だと思っ」

人の性別はXとYの二つの遺伝子で決まる。Xが二つ揃ってれば女性、XとYが一つずつで男性になる。

「と、ここまででは高校の生物の授業で習っな」
「私達まだ中学生でしょ」

俺は予習してんの。

それに来月から高校生だしな。

「けど、何となく分かったわ」

そう言っって佐奈がクローンを指差し、

「この子は宗也のX遺伝子だけを複製してXが二つ揃ったのね」
「察がいいな」

まだ検査はしてないから仮説の域を出ないものの、俺は自信があった。

クローンは自分の事だというのに無表情で頷いている。そこで佐奈がふと首を傾げた。

「うん？ それじゃ、この子は宗也のクローンというより……。」

佐奈の言葉の続きを想像した俺は心底ぞっとした。そんな俺の心境を露とも知らない佐奈は納得顔で手を打った。

「宗也のお母さんのクローンよね！」

せ、セーフ……。

俺は胸をなで下ろす。

佐奈が科学を苦手としていて助かった。真相を知ったらまた拳が飛んでくるに違いない。

安堵感に胸を一杯にしている俺はクローンが佐奈の発言に首を振った事に反応が遅れた。

「佐奈さん、この場合はクローンでは無く宗也さんとお母さんの」

「わああわああ！ 君は何で爆弾発言しようとしてんのかなあ！？」

慌ててクローンの言葉を遮って詰め寄る。

純真無垢すぎてお父さん心配よ！？

クローンは事態が飲み込んでいるのかいないのか全くの無表情。

佐奈は俺に疑うような視線を向けた。

「と、とりあえずはこのクローンの名前を付けておこうと思うけどうだ？」

早口で話をすり替えた俺を佐奈はまだ睨んでいたが、クローンが俺に同意したので渋々賛成した。

「宗也は元からクローンを創るつもりだったんでしょ？ 名前くらい予め考えときなさいよ」

「考えてあつたさ。だが、女に付ける名前じゃない」

「因みに、何と付けるつもりだったのですか？」

「……宗介」

クローンに訊かれてぼそりと答えた名前に佐奈が呆然と口を開けた。

「……だ、誰が考えたの？」

「俺に決まってるだろ」

「そんなはずない！ 幼なじみを騙そうだったって無理よ!？」

激昂した佐奈が叫ぶ。クローンは無言かつ流麗な動作で耳を塞いだ。

「あんたが付ける名前なんて昔からエンジェルブラッド天毒血とかダイクネスアルト暗黒音つて訳わかんないやつじゃない！」

「止めるっ。その名を大声で口にするなあ!!」

厨二病だったんだよ。幼なじみなら察しろよっ。卒業式は済ませたんだよ！ 厨二病に未来は見えないの!!

しかも悲しいことに佐奈が口にしたのは俺が特許申請した発明品あるいは商標登録した商品の名前だ。

近頃、世間様の視線が痛い。知ってるか、視線で人を殺せるんだぜ？

「……落ち着きましたか？」

さんざん言い争って、肩で息をする俺達にクローンが言った。

書記って誰？

「佐也香、準備できたか？」

名前を呼びながらクローンの部屋をノックする。
押しの強い母によって流行のキラキラネーム（金星とかそんなの）^{キラネーム}に決まりそうになったが、常識人である佐奈の徹底抗戦によりクローンの名前は佐也香に決まった。

佐奈と俺（宗也）の名前から一字ずつ取ってあるのには作為的な何かを感じるのだが、佐奈に聞いてもはぐらかされるだけだった。
男の俺では気が回らないことまで面倒を見てもらっているので強くは聞けずに高校入学の今日を迎えた。

「佐也香？」

返事がないのでもう一度ノックする。

佐也香のやつ、未だに羞恥心を身につけていないからな。許可無く開けたら下着姿だったり、報告を受けた佐奈に殴られたりするの
はもう嫌だ。

この半月は生傷が絶えなかったぜ……。

あれ、おかしいな。体の節々が痛い。またフラッシュバックか？

「できました」

佐也香が扉を開けて出てきた。

しっかりと制服を着ている。ぱっと見は問題がない。

「念のために聞いておくが、下着はつけているな？」

スカートをめくる訳にもいかないのでセクハラ染みた質問をする。佐奈がこの場にいたら俺の傷が増えていただろう。

「……………」

廊下に出ようとしていた佐也香が足を部屋に引っ込めて無言のまま扉を閉めた。

「忘れてたのか……………」

佐也香の高校入学に必要な書類を金や力や情報で揃えるのに掛かり切りだったので、本人の教育に時間を割けなかった。

よって、この有様である。

あまりにも当たり前すぎることを俺がインプットし忘れており、男を想定した教育プログラムの弊害で女としての自覚も薄い。

一応は佐奈が色々と教えているので最低ラインには達して――

「これですか？」

突如開けられた扉。

佐也香が右手に掲げた物を見て俺は即座に引いたくる。

「これは俺のパンツだ！」

見あたらないと思ったら佐也香が持ってたのか。

男物と女物の区別もつかないとは……………」

多難な前途を憂いて俺は天井を仰いだ。

俺の心配をよそに佐也香は玄関に歩き出す。

「ちゃんと靴を履けよ」

背中に声をかけると彼女は肩越しに振り返って頷いた。
俺も靴を持って後に続く。

我が家の玄関は余裕がある造りなので佐也香の隣に座って靴を履いても窮屈に感じない。

玄関扉に手をかけた俺は佐也香を促そうと振り返り、彼女の手元を確認してすぐに制止する。

「おい、下駄を履いていく気か？」

俺の問いかけにキョトンとした顔を向ける佐也香。

「ダメでしょうか？」

「お前の靴はこつちだ」

靴箱にあった佐也香のローファーを取り出すと彼女は両方を見比べて首を捻る。

「下駄の方が音が楽しいです」

……ローファーの靴底にカスタネットでも仕込んでやろうか？

名付けて、ダンシングゲー

いかん、ぶり返すところだった。

「どうかしましたか？」

ローファーを履いた佐也香が訊ねてくるのを適当にいなして、玄関扉を開く。

佐奈が靴を片手に待っていた。

「二人ともおはようーって、宗也は何で防御姿勢をとってんのよ」
「理不尽な暴力から逃れるためだ」

顔の前で縦にそろえた腕の間から答える俺に佐奈はため息をこぼす。

「佐也香、大丈夫だよな？」

やっぱり、佐奈も下着の心配するんだな。

「……………」

「見せなくていいから！」

スカートの裾を持ち上げる佐也香を佐奈が慌てて止める。

「白か」

純粋な佐也香に似合っている。

黒の下着でも肌の白さが強調されて良いかもしれないが、佐也香にはやはり白が適切だろう。

早い話が眼福である。

「……………宗也、今なんて言った？」

やばい。口に出しちゃってた。

佐奈が笑顔で詰め寄ってくる。

ふっ。だが、この俺の鉄壁のガードは破れまい。

そう思った瞬間には形のいい拳が眼の前に制止していた。

「えっ……………？」

「宗也は新入生代表だから今日は許してあげる」

拳を引きながらにつこりと微笑む佐奈に唾然とする。まるで動きが見えなかった。

俺のガードもちゃっかり弾かれてるし。

愕然とする俺に不敵な笑みを見せた佐奈は拳を引いて、佐也香の手を取った。

「遅刻する前に行くよ」

歩き出す二人の背中を追いながら、俺は空に祈った。

どうか、佐奈とは別のクラスになりますように。

暴力に怯える生活はもう嫌だ。

校長室に通された俺は頭を下げ、挨拶を述べた。

「よ、よく来たね。えっと、そうだ。ご入学おめでとう」

白髪のナイスミドルが上擦った声で歓迎してくれた。

引き吊った笑顔を浮かべる彼に教頭らしき男が同情の視線を送っている。

「校長先生、緊張なさらないで下さい」

落ち着かせようと笑顔を向けたが、校長の顔が青ざめるだけだった。

そんなに怖がらなくても良いだろうに。
キャバクラ通いなんて今時恥ずかしいくもない。

「奥さんはお元気ですか？」

「ああ、お陰でな。仲良くやっているよ」

恥ずかしくなくても恐いんだね。奥さんとか世間の目とか。
教育者は大変である。

「佐也香さんだったか。妹さんは息災かね？」

「お陰さまで本日入学の運びとなりました」

そうでないと言っしー交渉した意味がないからな。

「ところで、式の流れを確認したいんですが、変更はありますか？」
含みのあるやり取りを済ませて本題に移る。
リハーサルも昨日済ませたので変更など無いと思っていた。

「それが、生徒会長の糸澄さんがまだ登校していなくてな」

困った顔で校長が言う。

生徒会長と言われてぼんやりと思いつくのは眼鏡の先輩だ。
小動物チックな大人しい人だった。何かの罰ゲームで会長になっ
たんじゃないかと心配してしまう程に頼りない印象の女子生徒だっ
た。

入学式をすっぱかす度胸があるとは思えない。

「遅刻しているだけでしょ。もし来なかったら副会長が代わりを
やるんですか？」

会長と正反対の雰囲気を持つ優男な男子生徒を頭に浮かべながら訊ねると校長は首を横に振った。

「彼も来てなくてね。今朝、糸澄さんと歩いている姿を見た生徒はいるが、連絡がつかない」

ゴシップ記事の匂い！

冗談はさて置いて、代役無しか。別にプログラムをとばしても構わない気はする。

「代わりは書記の形蔵さんが務める」

誰だよ。

流石に書記の顔まで覚えてない。

「因みに、君と同じ一年生だよ。中等部から生徒会に入っているからね」

中高で一つの生徒会を運営していると聞いてはいたが、こんな事態にもなるのか。

同じ新入生、今日は主役だというのに歓迎役まで兼任とは、可哀想な奴である。

「それで、形蔵さんとやらは何処に？」

この天才に挨拶もないとは、恥ずかしがり屋さんめ。さして広くもない校長室に俺以外の生徒はいない。

となりの生徒会室にいるのだろうか。

そう思って壁をなんとはなしに見る。

物言わぬ白い壁が立ちふさがっていた。

「形蔵さんは生徒会室にいるよ。緊急で台本に目を通しているからそつとして置いてほしい」

校長が眉を八の字にして言った。

がんばる孫を応援するような口振りなのは、校長の名字も形蔵と
いうのが関係しているのだろう。

……十中八九、孫だな。

俺は壁に向い手をメガホン代わりにして口を開く。

「校長の行き着けはー」

「喋るな！」

威勢の良い台詞と裏腹に縋ってくる校長がうるさいのでメガホンを解く。

「孫の晴れ舞台を作るべく生徒会長並びに副会長を誘拐するとは何たる事か。校長よ、見損なつたぞ！」

「唐突に濡れ衣とな!？」

「ええい、黙れ! 証拠なんぞ三時間で揃えてみせる。大人しく縛につけえい!」

「揃つとらんじゃないか! 見切り発車でトンでもないことを言い出すでないわ!」

年甲斐のない言葉の応酬に校長は息を切らしている。

しかし、その顔は若い輝きに満ちていた。

「やるな、校長。これが年の功か」

「ふふふ。若い者のボケ程度、的確にツッコミを入れてみせるわい」

校長は生涯を賭けて倒すべきライバルに出会ったような満足げな顔で握手を求めてくる。

俺はそれを受け、固く固く握り込んだ。

結論、この校長《爺さん》は悪乗りし易いバカだ。

俺が居る！？

渦巻いていた。淀んでいた。負の感情がたゆとう控え室には発生源の少女がうなだれていた。

「なんで、私がこんな目に遭ってるんですか……。。」

両手で持った原稿が軽くひしゃげた。投げ捨てたい衝動を抑えているようだ。

俺は声を掛けるべきか悩みながらも少女の肩に手を置いた。そろそろ彼女の出演である生徒会祝辞が始まるからだ。

「人前に出る仕事は無いってみんなが言うから書記を引き受けたのに、なんでこんなもの読まなきゃいけないんですか……。生徒全員どころか保護者や市長まで居るじゃないですか。よりもよって私に代役を頼まなくてもいいじゃないですか！」

結局、生徒会役員で登校したのは書記である彼女、形蔵詩波だけだったのだから仕方あるまい。

だから、俺を恨めしそうに見るのは筋違いだ。

「さつき校長の話が終わった。出演だ」

無慈悲に告げた俺に形蔵は何故か怪訝な顔をした。

「私の出演は新入生代表の後ですよ？」

「え？」

こいつ現実逃避してやがるのか。

呆れてため息を吐いて見せると形蔵が不愉快そうに唇を尖らせた。

「私が原稿の内容をまだ覚え切れていないから順番を変えたんですよ。ほら、これ」

差し出されたのは入学式の内容が書かれたパンフレットだ。

確かに、新入生代表と入れ替わっている。

……ということは今、俺の順番じゃないのか？
慌てて舞台に目を凝らす。

「舞台に俺が居る!？」

なに言ってるか分からねえと思うが俺も何をされたか分からなかった。

しかも舞台の俺はスカート姿じゃねえか！

何がどうしてこうなった!？

混乱する俺の横で舞台を覗いた形蔵が感動したような吐息を漏らした。

「双子ですか。一卵性は初めて見ました」

は？ 双子？

疑問が頭を乱舞し、俺は結論に至った。

「……佐也香!」

あいつ、何してやがる。

原稿も無しに新入生代表やるつもりか？

今すぐ舞台に飛び出すのはまずい。式が台無しになる。

台本を基にカンペを作るか？

いや、駄目だ。舞台端に視線をやるタイミングがない。保護者達
の後ろで掲げてても離れすぎていて読めないだろう。

焦る俺とは対称的に舞台上の佐也香はのんびりと構え、講堂を見
回している。

大物だ、しかし全く安心できない。あれが嵐の前の静けさに思え
てならん。

司会役を務める教頭が俺たちの入れ替わりに気付かず式を進める。
というか、気付けよ。舞台の俺スカート穿いてるじゃねえか！
いや、俺じゃない。佐也香がスカートなんだ。

「もう訳わかんねえ……。」

頭を抱えてしゃがみ込んだ瞬間に打開策を閃いた俺は転がるよう
に部屋を出た。

制止をかける形蔵に構わず、目指すのは上にある放送室だ。

佐也香が話を始める前にマイクの電源を切り、放送室から俺が原
稿を読み上げてしまえ。

舞台近くの生徒は気付くだろうが大きな混乱は生まないはずだ。
肩で息をしながら放送室の扉を開ける。

「な、なんだ!？」

「君、いま舞台に……あれ?」

悠長にノックしてられないので勢いそのまま侵入してきた俺に音響
担当の先輩が驚いている。

制御板に飛びついた俺は即座に舞台マイクの電源を切った。
間に合った。

胸をなで下ろした直後、講堂を割れんばかりの拍手が満たした。
不思議に思っただけで舞台を見下ろす。

佐也香が一礼して舞台裾に消えていった。

……放送室まで二分と掛かってないんですけども。
なんで佐也香は出番が済んだとばかりに舞台裾へと吸い込まれた
んでしょうか？

生徒や保護者が感動の涙を流してるのは何故？
佐也香ちゃん、何してくれんてんの！？

「もう、本当に訳わからん……。」

俺は頭を抱えてへたり込んだ。

—————

舞台裾で校長と話す佐也香を見つけた。

舞台上では極度の緊張に固まっている形蔵がいる。

不安げにそれを見る校長が一方的に話しており、佐也香は無表情
で相槌を打つだけだ。

俺はそんな二人の前に回り込む。

「佐也香、ちょっと聞きたいことがあるんだが、覚悟は出来てんだ
ろうな？」

校長が俺達を見比べて感嘆の声を漏らした。

「君が佐也香ちゃんか。瓜二つじゃないか」

「俺が宗也だ！」

この爺さん、まさか勘違いしたまま話してたのか？

というか何で誰もスカートとズボンの違いで見分けようとしな

!?

「宗也さん、そんなに慌ててどうしました？」

君が原因です。察してくれ……。

泣きたくなってきた気持ちを深呼吸で押さえつける。

「佐也香が新入生代表をやったのは何故だ？」

無理に落ち着いて訊ねる。まずは経緯の把握からだ。

「そこのお爺ちゃんに引っぱられて、何時の間にか舞台に立ってました」

「校・長」

笑顔で振り返る。

弛みきった顔で孫に小声の声援を送る爺さんがいた。

どう料理してくれようかと指の関節を鳴らす俺を佐也香が止めた。

「ーというのは嘘です」

この流れでお茶目さんだと!?

「落ち着きましたか？」

「むしろ興奮したわ！ それっばい嘘吐くんじゃありません!!」

一瞬、信じちゃったよ。校長の夫婦関係を台無しにする方策とか考えたよ。

「それで、実際の経緯は？」

「校長に引っぱられて何時の間にか舞台上の上にいました」

それさっき聞いた……嘘じゃなかったようだ。

「落ち着きましたね」

「うん、まあね……。」

興奮を振り切って呆れちゃったからね。

脱力感に苛まれた俺は、それでも何とか気力を振り絞る。

「それで、佐也香。舞台上で何をしたんだ？」

感動で涙を流す人がいたり席を立って惜しみない拍手をしていた人がいたけど、佐也香がああ短い時間で何をしたのかは分からない。どうやればあんな空気を作り出せるのだろうか。

「校長のお話が長かったので短歌を詠み、式の時間を調整しました」

「ああ、短いわけだ」

短歌だしな。

「つて、納得できるかああああ！」

しかし、文句は言えん。

感動の渦を巻き起こしたのだし、情緒もある。結果を残している以上俺は何も言えない。

このやり場のない怒りをどうすればいいんだ。
決まっている。

「校・長」

爺さんの後ろ襟を掴んで引きずる。

「何だね？ 後にしてぐつ！？」

声が漏れないようにしないと。

「じゃあな、佐也香。佐奈が心配するから早く戻れよ」

無表情で手を振る佐也香に背を向ける。

さて、この爺さんにお灸を据えてもらいに行こう。

俺は携帯を取り出して校長宅に連絡した。

……その後、俺まで怒られた。

今まで隠していたから共犯だそうだ。

もう本当に訳分からんね。

俺はふらつきながら教室に入った。

正座で説教を喰らったため脚が痺れている。

この穂波高校では入学したその日に実力テストを行い、その結果でクラスが分けられる。

受かった事に安心して勉強を疎かにする奴がいるからこそその処置だ。

「203番は……ここか」

机の隅に貼られた数字と生徒手帳の番号を見比べて、俺は席に着くため椅子を引く。

前は未だ空席、後ろは机に突っ伏して寝ている茶髪の男子生徒だ。

「……お？ 代表じゃん」

俺が椅子を動かした音で目が覚めたのか、顔を上げた茶髪が声をかけてくる。

君の見た代表とは別人だが俺は確かに新入生代表だよ。

「女子なのに宗也って変わってるよな」

聞き捨てならないその言葉に、俺は制服を見せつける。

「ちゃんと見る。俺は男だ」

「……女装で壇上に出たのか。似合ってたぞ」

「目を逸らしながら言うな。あれは妹だ！」

そして似合っていたと言われても嬉しくない。

茶髪は冗談だと笑いながら手をひらひらと振った。

俺には分かる。こいつはまだ信じてない。

「信じたって。男装が趣味なんだろう？ あんまり似合っていないけど

個性って奴は尊重する男だぜ、俺は」

やっぱり分かってない。

というか仮に男装だとして似合っていないってのはどういう事だよ。

こめかみが疼くのを感じながら俺は口を開く。

「いいか、男装じゃなくて俺は男で、壇に上がったのは妹だ。別人

だつて事は分かるな？」

「分かつてるよ。だがその顔で男なはずないだろ」

茶髪はへらへらと笑いながら続ける。

「妹と顔がそっくりだし一卵性の双子だろ？ 片方が女ならもう片

方も女つて常識じゃん」

「一卵性ではない」

正確には双子ですらない。

「マジで？ 遺伝子強すぎだろ」

今更のようにやぶ蛇だったと気付いた俺は曖昧に頷く。

その後、父母どちらに似ているか等の世間話をする内に入学式の話になった。

「校長が30分近く喋ったからひ弱な生徒が運ばれていたりしてな」

倒れた生徒を思い出してか、茶髪男子生徒、大桂修一の顔に同情の色が浮かんだ。

なかなか良い奴かもしれない。

おそらく、校長の話が長引いたのは孫の詩波が台本を暗記するまでの時間稼いだ。

あの爺さん、本物の爺馬鹿である。いろんな意味で。

「それでみんなウンザリしている時に代表があっさりした短歌を詠んで場を閉めたんだよ。カッコ可愛かったぜ！」

グッドジョブ、とばかりに親指を立てる修一。

何度も言うが俺は別人である。

それにしても佐也香の奴、そんな技能を身につけていたとは……。やたらと本やマンガを読みあさっていたのは無駄ではなかったようだ。

流星は天才の俺が生み出したクローン。学習能力も応用力もずば抜けている。

圧倒的ではないか我が遺伝^{ぐん}子は！

俺が妹の成長に鼻を高くしていると茶髪がニヤニヤと口を開いた。

「感動した保護者まで巻き込んでファンクラブが結成されたらしいぜ。よっ、有名人！」

……ちよつと待て。

まさかファンクラブの連中が入れ替わりに気付いてない、なんて事は……。

慌てて修一を問い詰めようとした時、試験官の男性教師が入室した。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0121ba/>

どっぺる!?

2012年1月2日11時45分発行